

『ダンマパダアッタカター』における 在家阿羅漢についての一考察

香 月 拓

はじめに

『ダンマパダアッタカター』（以下 DhpA）は『ダンマパダ』（以下 Dhp）の註釈書である。その中で在家者の因縁譚に目を向けると、仏教を信仰していなかった者が出家をする前に阿羅漢果に到達したという事例がわずかながら見られる。ここで DhpA に 5 つ見られる在家阿羅漢の因縁譚を表記する。これら以外にも、出家をするために剃髪している最中に阿羅漢果に到達した者や、外道の出家者が仏教に改宗する前に阿羅漢果に到達する因縁譚もあるが、出家をしようという意思を持つ前の者に焦点を絞ったので、ここでは除いている。

DhpA ¹⁾ (Dhp の偈)	名前 ²⁾	説法者	阿羅漢果到達後
VIII-2 (101 偈)	バーヒヤ (商人)	釈尊	般涅槃
X-9 (142 偈)	サンタティ大臣	釈尊	般涅槃
XVII-5 (225 偈)	バラモン老夫婦	釈尊	般涅槃
XXIV-5 (347 偈)	ケーマー王妃	釈尊	出家
XXIV-6 (348 偈)	ウツガセーナ (軽業師)	釈尊	出家

このように、在家者のまま阿羅漢果に到達した者は全て釈尊の説法を受けていることがわかる。また、この 5 人は性別も身分もそれぞれ違っている。さらに阿羅漢果に到達した後は出家をするか般涅槃をするかに限られている。

本研究では在家者がどのように釈尊に出会い、説法を受けたのかという事例を調べていき、阿羅漢果に到達する過程を明らかにしていく。その中でも Dhp.101 偈と 142 偈の因縁譚を扱う。それは阿羅漢果に到達することと過去世の行為とが特に深く関わっているからである。そして説法者や阿羅漢果到達後の問題を通して、DhpA で在家阿羅漢がどのように扱われていたのかを考察していく。

1. Dhp.101 偈の因縁譚から見る在家阿羅漢

航海中に嵐に遭い、1 人だけ助かったバーヒヤはスーパーラカという港町で木

(178) 『ダンマパダアッタカター』における在家阿羅漢についての一考察 (香 月)

の皮で身体を覆い、托鉢による生活をしているうちに阿羅漢であると思われるようになった。彼自身も自分が阿羅漢であると思い込みはじめたが、彼の過去世の縁者であった神に間違いを指摘された。その過去世の因縁とは次のようである。

カッサパ仏の時代に7人の比丘たちは、沙門法を行なった。そこで1人の比丘が阿羅漢果に到達して、自分の持ってきた鉢食を他の比丘たちに与えようとしたが、彼らは受け取らなかった。その翌日、同じように1人の比丘が不還果に到達した時も同様のことが起こった。残りの比丘たちは、その後命終して天界に生じて、釈尊出生時に良家俗家に再生した。その中の1人がバーヒヤである。

この神はサーヴァッティに釈尊がいることを述べて「バーヒヤよ、実に彼は世尊であり、まさに阿羅漢であり、阿羅漢果に到達するために法を教示している」と告げた。バーヒヤは神の話聞いて驚怖した気持ちが起こった。そして釈尊に会いに行き、説法をお願いした。ここでは説法の内容は省略されているが、『ウダーナ』(以下 Ud) に表記されているため、それを次に示す。

「見られたものにおいては見られたものだけがあり、聞かれたものにおいては聞かれたものだけがあり、考えられたものにおいては考えられたものだけがあり、知られたものにおいては知られたものだけがあるであろう。バーヒヤよ、実にあなたはこのように学ぶべきである。バーヒヤよ、実にあなたにとって見られたものにおいては見られたものだけがあり……知られたものにおいては知られたものだけがあるであろう。それゆえにバーヒヤよ、あなたはそこにいない。バーヒヤよ、あなたはそこに全くいないのだから、それゆえにバーヒヤよ、あなたは実にこの世にもかの世にも両世の間にもいない。まさにこれこそが苦の終わりである」と。(Ud, p.8)

彼は釈尊の法を聞くと同時に一切の煩惱を捨てて、無碍解とともに阿羅漢果に到達した。その後バーヒヤは出家を願い出ているが、過去世において衣鉢に対する愛護がなかったために、釈尊に「衣鉢を求めてきなさい」と言われた。バーヒヤは衣鉢を求め歩いている時に雌牛に殺されて般涅槃した。(DhpA, vol.II, pp.209-217)

バーヒヤは過去世の縁者であった神に、現世で「あなたは阿羅漢ではない。真の阿羅漢は他にいる」と言われて、今まで阿羅漢だと思い込んでいた自身を慚愧する心と、真実を求める宗教心が起こったのであろう。バーヒヤは釈尊の説法によって、あるがままの事実をそのまま受け入れられない自我に執着した自身こそが苦の因であったと気付いたのである。彼はそのわずかな説法で阿羅漢果に到達して苦滅を得たのだが、その機根を見ると、過去世に比丘として修行していることが大きく影響していることがうかがえる。

ちなみに Dhp.100 偈の因縁譚では、元盗賊でその後 55 年間死刑執行を行ない

『ダンマパダアッタカター』における在家阿羅漢についての一考察（香 月）（179）

続けたタンバダーティカがサーリプッタの説法を受けている。しかし彼は預流道に随順する信が生じた後、雌牛に化けた夜叉女に胸を打たれて殺されている。そして彼は死後、兜率天に生まれた。この因縁譚の中では、なぜ夜叉女が化けた雌牛に殺されたのかという過去世の因縁は語られていない。しかし Dhp.66 偈の註釈である DhpA.V-7³⁾ の過去の因縁の中にタンバダーティカという名前が登場する。そこには、昔、ある遊女と快樂に耽った後、その女の人を殺して宝石類を奪った4人の若者のうちの1人がタンバダーティカであると記されている。

このように比較すると、在家者の得果は過去世と現世の業や機根が大きく影響していることが見て取れる。しかしそれだけではなく、在家のまま阿羅漢果に到達した者たちはいずれも釈尊の説法を受けている。DhpA 中の在家者にとって、釈尊に出会い説法を受けるということが阿羅漢果に到達するためには必要だったのである。換言するならば、在家者が釈尊の説法を受けずに阿羅漢果に到達する事例は見られない。それほど釈尊に出会い説法を受けるということは大きな意味を持っていたと考えられる。

2. Dhp.142 偈の因縁譚から見る在家阿羅漢

パセーナディ王に仕えるサンタティ大臣はある踊り子を愛するようになった。ある日、大臣は沐浴に行く途中に釈尊に出会い礼拝した。その日、大臣の愛するその女性が急死して彼は非常に悲しんだ。彼は師の面前に行き、礼拝してから「尊者よ、この身には私の憂いが生起してきます。私の憂いをあなたは消すことができるだろう」と言った。その時、師は「あなたはまさに憂いを消すことができる者の前に来たのである。実にこの女性がこのようなあり方で死んだ時、あなたが泣きながら流す涙は四海の水よりも多い」と言ってから次の偈を言った。

過去においてそれ（執着）を明確にすべきである。未来において何も所有してはいけない。もし現在において執着することがなければ、あなたは寂靜なる者として歩むであろう。

偈が終わった時に大臣は阿羅漢果に到達して、自分の寿行が続かないことを知って、師に「尊者よ、私が般涅槃することを許して下さい」と言った。釈尊は、集まった正見者たちが大臣の過去世の因縁を聞いて、彼の行為を尊敬するだろうと観察して「それではあなたによってなされた行為を私に語りなさい」と言った。大臣は空中で自分の過去世を語った後、般涅槃した。（DhpA, vol.III, pp.78-84）

サンタティは愛する女性の死という現実の前に自分の想いが打ち砕かれて諸行無常を感じたのである。釈尊はサンタティ自身の内側から起こる憂いは執着であ

(180) 『ダンマパダアッタカター』における在家阿羅漢についての一考察 (香 月)

ると説いている。この釈尊の説法により、サンタティは自身が我執存在であることを自覚したのである。サンタティは釈尊のわずかな説法によって阿羅漢果に到達しているが、彼の機根を見ると、仏法を称賛する行為を過去世に行なっていることが大きく影響していることがうかがえる。サンタティの過去世とは、一切の瓔珞で飾り、象の背に乗って「仏宝などと等しい宝はない。三宝に恭敬すべきである」と法を称賛する行為を八万年間行なったことである。

また、サンタティと同じ境遇を経て仏教に帰依したアバヤ王子の因縁譚がある⁴⁾。ピンビサーラ王の息子であるアバヤ王子は、ある踊り子を愛するようになった。しかしその踊り子が命終した時、サンタティ大臣と同様に釈尊に近づいて「尊者よ、私の憂いを消してください」と言った。釈尊は彼を安心させて憂いが弱まったことを知って「童子よ、憂いてはいけない。これは愚痴なる人々の沈没する場所である」と言って「さあ、彩られた王の車の如きこの世間を見なさい。愚か者たちが沈む所に智者たちが執着するものはない」と説いた。

愛する女性を失い世の無常を感じるという同じ境遇をサンタティとアバヤは体験している。しかし、アバヤは同じ釈尊の説法を受けたにもかかわらず預流果に到達したのみである。また、アバヤに過去世の因縁は記されていない。サンタティが在家のまま自ら過去世の因縁を語り般涅槃したということは、まさに生死の苦を超えた者となったということであろう。

先述したように、DhpA の在家阿羅漢は出家、或いは般涅槃している。出家前に阿羅漢果を得たケーマー王妃について、釈尊は「ケーマーは出家、或いは般涅槃すべきである」⁵⁾と述べている。これは『ミリンダパンハー』で「大王よ、在家者の特相は不正である。不正な特相であるとき、特相の弱力のために、阿羅漢果に到達した在家者は、その日に出家するか、或いは般涅槃するのである」⁶⁾と述べられていることとも一致している。すなわち、上座部は在家阿羅漢の存在を認めていたが、阿羅漢のまま在家で生活することは不可能であるという見解を持っていて、それがDhpAにも反映されていたと考えられる。これは釈尊の「在家のもののように、諸欲を享受することは不可能である」⁷⁾という考えによるものであろう。釈尊は在家者の本質を諸欲の享受であると観察して、人間が在家者として生きながら阿羅漢の特相を維持することは非常に困難であることを見抜いていたのである。

『ダンマパダアッタカター』における在家阿羅漢についての一考察（香 月）（181）

おわりに

ここまで DhpA における在家阿羅漢の事例を調べてきた。釈尊が在家者の本質を諸欲の享受と観察したように、人々が実際に生活する上で阿羅漢に到達し、さらにその特相を維持することは非常に困難であったのだろう。故に DhpA に在家者が阿羅漢果に到達する事例がわずかしか見られないとも考えられる。しかし在家者が阿羅漢果に到達することは不可能ということではない。DhpA ではその者の過去世からの機が熟している時に釈尊の説法を受ける、即ち時機が相応することが阿羅漢果に到達する重要な過程として考えられていたのであろう。

在家のまま阿羅漢果に到達した者はいずれも、愛する女性の死などという自身の計らいではどうにもならない事実を体験しそれを受け入れられない苦悩の中で釈尊に出会っている⁸⁾。そこで自我に執着した自身こそが苦しみの因であったと仏教によって気付いた時、真に仏法を体解し苦悩を超えていく者となるのであろう。これは、真に仏法に生きた釈尊に出会うことで初めて気付くことであり、世間で我執を生きる人間の方から気付けることではない。そしてそれに気付いた者は誰であっても、世間のものでは満足することがなくなり、出世間の法を拠り所にする者となるのであろう。DhpA の在家阿羅漢たちはそのような生死の苦を超えた人間の相を示すと同時に、身分や性別、出家と在家などの違いに関係なく仏法は成就することを示しているのではないだろうか。故に釈尊は、阿羅漢果に到達するための法を示す者として、様々な人に法を説示したのであろう。

1) DhpA のローマ数字は章番号を示す。

2) 因縁譚の中で釈尊に説法を受ける

者の名前を示す。

3) DhpA, vol.II, pp.33-37.

4) DhpA, vol.III, pp.166-167.

5) DhpA, vol.IV, p.59.

6) *Milindapañhā*, p.265.

7) 釈尊はヤサが在家のまま

阿羅漢果に到達した時「良家の子ヤサは還俗して前の在家のもののように、諸欲を享受することは不可能である」と述べている。(Vinaya-piṭaka, vol.I, p.18)

8) DhpA,

vol.II, p.213, vol.III, p.80, vol.IV, p.57, 62.

〈略号・テキスト〉

Ud: *Udānam*, edited by Paul Steinthal, PTS, London, 1885

Dhp: *Dhammapada*, edited by O. von Hinüber and K. R. Norman, PTS, London, 1994.

DhpA: *Dhammapada-Atthakathā. The Commentary on the Dhammapada*, edited by H.C. Norman, PTS, London, vol.I, 1906: vol.II, 1911: vol.III, 1912: vol.IV, 1914.

〈キーワード〉 『ダンマパダアッタカター』, 在家者, 阿羅漢果, 般涅槃

(大谷大学大学院)